

---

~ 藤田まことさん追悼 ~      !!必殺仕事人!!

ターザン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「藤田まことさん追悼」

！！必殺仕事人！！

### 【Nコード】

N6569M

### 【作者名】

ターザン

### 【あらすじ】

いつの時代も恨みの絶える事はない。

表はしがない一般人

裏は腕前の殺し屋

それが仕事人。

恨みを晴らすために彼らは今日も走る。

夫婦を狙う辻斬り 前編（前書き）

という事で全2話でこの小説を書こうと思います。  
登場人物

中村主水

飾り職の秀

三味線屋の勇次とおりく

なんでも屋の加代

そしてオリジナル仕事人

笛屋の又吉

琴屋の菊造

です、では本編へ

## 夫婦を狙う辻斬り 前編

人の世の、善と悪とを比べれば、恥ずかしながら・・・悪が勝つ。  
晴らせぬ恨みの数々を晴らしてやるのが裏家業、お釈迦様でも気が  
つくめえ。

時は江戸

一人の役人がいた。

彼の名は中村主水、表ではしがない役人だが裏ではかなりの腕を持  
つ仕事人（元締め）だ。

主水「町内の見回りはだるくてしょうがない。」

そこに喧嘩の声が出た。

「???」「この野郎！さつさと店たためや！目障りで仕事にもならね  
えや！」

「???」「売ってる物が違うのにいちいち文句言わないでくださいよ。」

片方の口が悪い男は笛屋の又吉、仕事人だ。  
片方の丁寧な口調の男も仕事人、琴屋の菊造だ。  
いつも又吉に文句をつけられ喧嘩をしている。

町民1「またあの2人喧嘩してやがる。」

町民2「本当に仲が良いわね。」

主水はそこに割って入る。

主水「こらこらお前ら、またこんな所で喧嘩か!？」

又吉「旦那!こいつの店早くたたませてくだせえよ！」

菊造「だから何で売ってる物違うのに文句をつけるんですか!？」

主水「だああ、うるせえうるせえ、2人共豚箱に放り込むぞ！」

2人は一瞬で静かになり店の中に戻る。

主水「つたく、いつもいつも。」

その夜

「キヤアアアア！」

「ウワアアアア！」

ある夫婦が何者かに襲われた。

主水「田中様!また例の辻斬りです!」

彼は主水の上司、田中だ。

田中「そんな事わかってますよ、その件については我々は手をだす

などお上から言われてるんです。」

主水「えっ!?!」

翌朝

「父ちゃん!母ちゃん!目を覚まして!!」

殺された夫婦の子供が夫婦の死体を見ながら泣き叫ぶ。

主水がその現場をこっそり見に行くが

役人「こら!!ここはお前が出る幕はない!!帰れ帰れ!!」

主水(チツ、うるせえ若造だぜ。)

????「八丁堀。」

主水「!、加代じゃねえか。」

彼女は仕事人であるが殺し専門ではなく主に仕事人のサポートを行う  
うなんでも屋の加代だ。

加代「秀と勇さんが江戸に帰って来たみたいだよ、あとおりくさん  
もね。」

主水「何だって!?!」

????「久しぶりだな、八丁堀。」

????「相変わらず下っ端役人か？」

????「全然変わらないね。」

主水「うるせえ!!！」

一人の男の名は秀、江戸で飾り職をしている。

もう一人の男の名は勇次、江戸で三味線屋をやっている。  
もう一人女がいた。彼女はおりく、勇次の母親だ。

三人共仕事人だ。

主水「ところで何で三味線屋に集まってるんだ？」

秀「最近、夫婦を襲う辻斬りの話が流行ってるだろ？」

勇次「どうもその夫婦には共通点があるんだ。」

主水「何だそれは？」

おりく「その夫婦は必ず2人以上子供がいるのさ。」

主水「偶然じゃねえのか？」

秀「偶然にしては出来すぎだろ、奉行所の調べはどうなってんだ？」

主水「お上からこの件については手をだすなって言われてるらしくてよ。」

勇次「お上に？」

おりく「なにか裏がありそうだね。」

主水は又吉と菊造にもこの事を話し、調べてみる事にした。

その夜

殺された夫婦の子供がほんのわずかな金を持ち、あるぼろ寺に来た。仕事人は江戸の町では噂として流れているのだ。

子供「ここに・・・金を置いていけば・・・恨みを晴らしてくれると聞きました。お願いです、父ちゃんと母ちゃんの恨みを晴らしてください！」

子供は金を置いて立ち去った。

加代はその金を預かる。

そしてまた辻斬りがある夫婦を襲う。

辻斬りは顔を隠してよく見えない。

又吉は秀と共に辻斬りのあとを追う。辻斬りはある屋敷に入っていた。

秀  
……

又吉（たしか町でも有名な金持ち夫婦の住む屋敷だぜ、秀さん。）



秀は屋根裏から  
又吉は床下から  
屋敷に忍び込む。

つづく

夫婦を狙う辻斬り 前編（後書き）

次回、仕事だぜ。

夫婦を狙う辻斬り 後編（前書き）

仕事人、出陣！

## 夫婦を狙う辻斬り 後編

秀は屋根裏

又吉は床下から会話を聞く。

辻斬り「ただいま戻りました、父上、母上。」

又吉（なるほど、辻斬りはこの屋敷の息子だったのか。）

秀（たしかここの主人はお上のお偉いさんだったか。）

辻斬りの名は末造

父の名は正山

母の名はお富  
だ。

正山「今日は2人が、よくやった。」

お富「これでまた子供に恵まれている奴らが減った。」

末造「しかしなぜ子供が2人以上の夫婦に限りをも？」

お富「お前は養子だとうことは知っていますね？」

末造「はい、たしか母上の体は子供が産める体ではないからと聞いております。」

正山「私達は子供に恵まれている奴らを見ると腹が立つ、だから剣の腕が確かなお前に頼んだのだ。」

お富「正山殿が金さえ出せば奉行所なぞ無いのと同じだ。」

末造「・・・申し訳ございません！実は殺しをある女に見られてしまったのです！」

正山「何と！！真か！？」

お富「安心してください、金で盗人に頼んでおきましょう。その女を殺せと。」

末造「ありがたき幸せ。」

秀（なんて奴らだ。）

又吉（早く旦那達に知らせないと！）

翌日

菊造「はい、今日の稽古はここまで。」

菊造は琴の稽古も掛け持ちしているのだ。だが、その稽古にはいつも熱心で努力家のお花がいなかった。

菊造「あれ？お花ちゃんは？」

生徒「わからないですね、いつもは来てるのに。」

菊造は不安になりお花の家に立ち寄る事にした、その途中勇次に出会った。

菊造「勇さん、どうしてここに？」

勇次「この先の家に住んでる娘さんの母親が病気で死んだみたいだよ、その母親さんよく家の三味線屋に来てたから線香の一つでも立ててやるうかと。」

その娘がお花だと菊造はすぐにわかった。

菊造と勇次はお花の家に行く途中二人の目の前を三人の男が慌てて走って行った。

菊造「!!!、勇さん!!!」

勇次「血の匂いだ。」

二人は慌ててお花の家に行き中に入った。そこには血まみれのお花が倒れていた。

菊造「お花

ちゃん！」

お花は口を開く。

お花「菊造先生……」

勇次「一体どうしたんだ!？」

お花「盗人が……入って来て……たぶん私が……辻斬りを見

たからだと・・・」

菊造「わかった、だからもうしゃべるな。」

お花は手に財布を握りしめていた、それを菊造に渡す。

お花「これで・・・仕事人を探して・・・辻斬りに・・・殺された人達の恨みを・・・」

菊造「お花！！！」

仕事人の隠れ家

主水「それで、どうするんだ？」

菊造「頼み人のお花は、自分じゃなくて殺された人達の恨みを晴らしてと言った。」

加代「頼み人は夫婦の子供とお花だね。」

加代は金を台の上に置く。

それぞれ金を均等に分け、彼らは仕事に出る。

秀は簪を研ぎ

勇次は三味線の糸を手入れ

菊造は琴の爪を研ぎ

又吉はなにやら赤い糸をなにかに結びつけ  
それぞれは屋敷に忍び込む。

盗人1「さあて、もらった金でも数えるか。」

盗人2「けっこうもらったよな？」

秀は屋根の上で簷をくわえて盗人を待つ。

勇次は屋根裏で三味線の糸をくわえて糸を張る、そして糸を盗人に目掛けて放った。

盗人2「ぐっ！」

糸は盗人の首に巻きつき勇次は屋根裏から飛び降り盗人を吊り上げる。

盗人1「なんだ！？お前は！？」

勇次は糸を指で弾いて盗人の息の根を止める。

糸を切り盗人をその場に落とす。

盗人1「ウワアアアア！」

盗人は外に逃げ出すが秀が屋根から飛び降り盗人を捕まえ、口から簷を抜き指で簷を回し盗人の首に突き刺す。

盗人「！！！！」

簷を抜き、盗人はその場に倒れる。

盗人3「あああ、眠いなあ。」



盗人は屋敷の周りを見回っていた。

木陰には菊造が潜んでいるの知らず。

菊造は服で手を隠し、盗人に話かけた。

菊造「すみません、道に迷ってしまつて。」

盗人3「あん？何だよ俺は忙しいんだよ！早くあっち行け！！」

菊造「わかりました。」

その時、菊造は服から手を出した。

その手には琴の爪がはめてありそれで盗人の喉を素早く切り裂いた。

盗人3「かつ！！！」

菊造「あんたのあとに行くよ、地獄にな。」

盗人は倒れる。

お富「盗人の奴ら、遅いね！集まるように言つたのに！！」

お富は部屋でいらだつていた。その外では又吉がいた。

又吉は笛を取り出し、笛のふたを回すと先の穴から三角錐型の太い針がでてきた。その針を手でつかみ引つ張ると赤い糸と繋がっていた。

又吉「お命、頂戴！」

又吉は笛を部屋に向かって振る、赤い糸はみるみる伸びていき針は  
ふすまを貫通、そのままお富の首に突き刺さった。

お富「!?!?!」

又吉は笛を引つ張り糸を縮め針を笛の中に収納した。

正山「末造、そろそろこの家をお前に託そうと思つのだが。」

末造「真でございますか!?!」

その時、声が聞こえた、おりくだ。

おりく「それは閻魔さんの所でやるんだね。」

正山「何者だ!?!」

正山は部屋から出ると三味線のばちで首を切り裂かれた。

末造「父上!?!」

「安心しな、すぐに会えるぜ。」

末造は恐ろしくなり、部屋から出て屋敷の入り口に向かう、しかし  
入り口の戸から刀が伸び末造に突き刺さった。

末造「ぐえっ!?!」

主水「地獄でな。」

仕事人の仕事は終わらない、悪がなくなるその日まで。

完

夫婦を狙う辻斬り 後編（後書き）

藤田まことさん永遠に！！

## 我が子の大切さ 前編（前書き）

なんか前回ののが適当に感じたので、しばらくつづけようと思います。

## 我が子の大切さ 前編

ある夜

ある家で激しい物音がする。

????「この出来損ないが！」

この男の名は勘吉ある家の主人だが

????「お許してください！父上！」

彼は優しい心の持ち主、三造。

勘吉の息子だ。

三造は勘吉に毎晩激しい暴力をふるわれていた。

勘吉「俺に迷惑ばかりかけやがって！今日も飯抜きだ！外で寝てやがれ！」

三造「……はい。」

勘吉は三造に対して3日間風呂、飯抜きにしていた、あるのは激しい虐待だけ。

翌日

主水「りつ、朝飯はこれだけですか？」

主水の妻・りつが口を開く。

りつ「ごめんなさいあなた、めざしにお米だけで・・・」  
そこにりつの母親・せんが怒鳴りつける。

せん「りつ！・・・かまいません、婿殿にはこれで十分です！」

主水「そ・・・そんな・・・」

せん「しゃべる暇があるなら早く仕事に出てください！」

主水「はい・・・（はあ、頭が上がんねえや。）」

主水は仕事に出る途中三造を見つけた、しかし三造は通っている寺  
子屋の子供に激しいいじめを受けていた。

子供1「やあい、骨男！」

子供2「臭いんだよ！あっち行け！！」

子供3「うわっ！汚いのがうつる！」

主水「こら！お前ら、やめんか！」

子供達は舌打ちをして立ち去った。

主水「大丈夫か？」

三造「あ・・・ありがとうございます。」

主水は三造の姿を見て驚愕した。  
体はあかだらけ

無数のあざ

弱りきつた手足

あきらかに虐待のあとだ。

主水「おめえ、一体誰に!？」

三造は何も言わず走り去って行った。

主水「心配だ、あとで田中様に伝えておこう。」

主水は奉行所に行き、上司の田中に伝えた。

田中「それは本当ですか!？」

主水「はい、確かにこの目で見ました!」

役人達はすぐさま寺子屋に行き、三造を見つけ事情を聞く。

役人「確かにひどい体だ、一体誰に!？」

三造「ち……」

勘吉「三造!」

そこに勘吉がやって来た。

勘吉「三造!また喧嘩しやがって!」



主水「喧嘩？」

勘吉「へへっ、こいつ本当に喧嘩好きで風呂嫌いで、毎日言ってるんですけどねえ。」

もちろん勘吉は自分が疑われないように嘘を言っている。

田中「なんだ・・・中村さん、どうなるかわかってるでしょうね？」

主水「あっ・・・はい（可笑しい、だったらさっきのとっくに喧嘩になってるはずだ、なんか裏があるな）。」

そのころ、町では又吉が笛を吹いていた。

又吉「仕事が休みてのも暇だな。」

そこになんでも屋の加代が又吉に話かけてきた。

加吉「笛屋、ちょっと頼み事があるんだけど。」

又吉「おお、加代！俺に？」

主水「そついうわけなんだが、頼めるか？」

主水は琴屋の菊造に三造の事を調べてほしいと頼んだ。

菊造「いいですよ、まかせてください。」

菊造は三造の事を調べ、又吉は加代になんと寺子屋を調べてほしいと頼まれた。

又吉は寺子屋に忍び込み聞こえる会話を聞いた。

子供「神楽先生、三造が隣だと臭くてしょうがないんですよ。」

神楽「忒平、それは私も同感だ。虐待とはいえ、自分でなんとかしない奴が悪い。」

なんと先生の神楽は三造が虐待を受けているのを知っていた、その上生徒の忒平と三造を非難していた。

又吉（とことん腐りやがって。）

勘吉「このクソガキ！役人にバレたらどうするんだ！」

三造「す……すみません。」

勘吉は相変わらず三造を虐待していた。

家に忍び込んでいた菊造はそれを見ているしかなかった。

菊造（なんてむごい事を。）

その夜

菊造はもう少し調べるために家に残っていた、その時家に寺子屋の先生・神楽、生徒の式平が入ってきた。  
三造は寝ている。

勘吉「先生、式平、どうしたんですか？こんな遅くに。」

式平「勘吉さん、三造の事なんですけど・・・始末しません？」

つづく

我が子の大切さ 前編（後書き）

次回、恨み晴らしやしよう。

我が子の大切さ 後編(前書き)

許せぬ悪人を野放しにはしない。

## 我が子の大切さ 後編

勘吉「三造を？」

式平「はい、あいつ鬱陶しいし・・・」

神楽「勘吉さんも邪魔でしようがないでしょう？」

勘吉さん「へへ、そうだな。奴が居なくなれば俺は楽になれそうだし。」

勘吉は教師であり侍である神楽から短刀を受け取り三造を殺そうとする。

その時、三造が

三造「父上・・・こんな僕を・・・お許してください。」

勘吉「!!--!!」

三造は寝言でそう言い、寝ながら涙を流す。

神楽「勘吉さん？」

勘吉さん「・・・やっぱりやめましょう。」

式平「急に何を!?!」

勘吉は短刀を床に落とし言った。

勘吉「確かに三造は鬱陶しかった、でも死んだ妻が三造を産んだ時、とても嬉しかった。妻との約束を忘れてました、妻のかわりに2人で幸せに暮らせという約束を！」

三造の母親は体が弱く、三造を産んで数日後に死んでしまったのだ。勘吉は妻との約束を思い出した、しかし

式平「どいつもこいつも、鬱陶しい。」

神楽「そんなガキのかわりなんていくらでもいるんだよ。」

神楽は刀で

式平は床に落ちた短刀で2人を刺したのだ。

三造「うわあああ!!」

勘吉「三造おおお!!」

神楽と式平は家から出て逃げ出した。

又吉は突然の事に唾然としたが急いで勘吉の所に行く。

勘吉「へへ・・・隠れるの・・・もうちょい上手く・・・やりな。」

勘吉は又吉が隠れているのを知っていた。

又吉「あんた、三造の事・・・」

勘吉「嫌な父上を・・・演じて・・・後でこれ渡して・・・驚かそうとしたんだが・・・無理みたいだ。」

勘吉は又吉に三造に渡すはずだった金を渡して息絶えた。

仕事人の隠れ家

主水「頼み人は勘吉と三造、的は2人か……。」

加代「1人は侍だ、あんたら2人で殺りな。」

又吉「しかたねえなあ。」

菊造「では、行きますか。」

4人は金を均等に分け、各自準備にとりかかる。

神楽「なんであんな最後をとげたんだ？」

式平「馬鹿だからですよ。」

神楽「ははは、そうだな。では私はそろそろ……。」

神楽は夜の町を歩く。

建物の間には又吉が笛を構えて待っていた。

神楽は気配を感じ取り刀に手をそえる。

又吉「お命、頂戴！」

神楽は刀を抜くが又吉は笛を神楽に向けて振り、太い針がついた赤



い糸を腕に巻きつける。

神楽「くっ！この・・・」

その時、建物の屋根の上には菊造が飛び降り、琴の爪で糸に戸惑っている神楽の首を切り裂いた。

神楽「！！・・・」

神楽はその場に倒れ込む。

式平「あゝ、一人酒つてのもなんか寂しいな。」

ふすまにもたれながら式平が呟く。  
そこに

「すぐに先生の所に逝かせてやる。」

式平「！！」

ふすまを開けた瞬間飛び出した刀が式平の腹に突き刺さる。

式平「あっ・・・」

式平は倒れ込んだ。

主水「血の池地獄の味見をしてこい。」

翌日

りつ「あなた、朝の稽古をしますよ！」

主水「夜勤だったんだからゆっくり寝かせてくださいよ。」

せん「なりません！早く着替えて外に出て！早く！！！」

主水「はっ！！はい！！！」

おわり

我が子の大切さ 後編（後書き）

何だかんだでしばらく続けるかもしれない

交代連鎖 前編（前書き）

間があきましたが

## 交代連鎖 前編

のさばる悪を何とする、天の裁きも待つてはおれん、この世の正義もあてにはできん・・・闇に裁いて仕置きする。

・・・

又吉「・・・・・・・・」

又吉は熟睡していた、その時何者かが又吉の家の扉を何度も叩く。

又吉「んあ？・・・んだよ、うるせえなあ。」

又吉が扉を開けると一気に形相を変える、蕎麦屋の店主だ。

店主「おい、又吉。」

又吉「い・・・いやあ、オヤジさんどうしたの、店主「ツケの支払い、又吉「来週に、店主「先週も聞いた、又吉「(汗)。」

又吉は行きつけの蕎麦屋に一週間分のツケがあるようだ。

又吉「金がなかなか・・・ねえ？」

店主「じゃあ外に置いてあったこれ!!」

それはかなり高値の酒の入っていた小さな入れ物だった。

又吉「あの・・・その・・・勘弁!!」

又吉は部屋の裏口を突き破って逃げ出した。

店主「待て!!こらあ!!」

又吉は俊敏な動きで店主から逃げ切る。

.....

又吉「あああああ、面倒くせえ・・・しつこいんだよあのオヤジ。」

????「お前が悪いだろ。」

又吉は振り返った、そこに見知らぬ男が釣りをしていた。

又吉「何だあんた？」

????「最近江戸に来た、釣り道具を売っている・・・作造だ。」

又吉「あ・・・そう。」

又吉はとりあえずその場を立ち去った。

作造「・・・随分荒っぽいやり方してんだなあ、仕事。」

作造は魚を釣り上げてそうつぶやいた。

.....

江戸の町では中村主水がイライラしながら見回りをしていた。

主水「つたく・・・あのクソババア、最近大老がコロコロ変わってよくわかんねえ事になってんのに出世だのなんだの・・・」

最近江戸では長くて1年、短くて2ヶ月で大老が変わっているのだ。そして町の政治がぐちゃぐちゃになっていた。

菊蔵「あつ、八丁堀。」

主水「ん？琴屋か、どうした？」

菊蔵「瓦版見ました？前回の大老が処刑されたみたいですよ。」

主水「何だそりゃ!？」

最近大老が変わるとその大老だった人物が処刑されるのが町で起こっていた、前々回の大老もその前の大老も処刑されていた。

加代「八丁堀!!」

主水「何だよ、なんか集まってくるな。」

加代「話は聞いたよ、これ・・・仕事の匂いがするよ。」

主水「ああ、俺もだ。」

.....

???「えゝ新たな大老はこの坂上慎之介様に決定いたしました。」

慎之介「これからは民の為に、努力をしていく・・・わざわざすまぬな平蔵。」

平蔵「何を言われますか、慎之介様のためなら何でも。」

新たな大老が坂上慎之介という人物になった、そして慎之介にかえているのは平蔵である。

そして誰もいなくなった屋敷では

慎之介「はははは！！平蔵、私を大老にするために前大老を辞めさせそのうえ処刑にするとはな！！」

平蔵「慎之介様のためなら何でもと言ったはずですよ、お前達も飲め。」

平蔵は護衛2人に酒をくむ、最近の大老交代連鎖はこの4人の仕業だったのだ。

???「・・・なるほどな。」

・・・

翌日、主水は川で釣りをしている作造を見つける、何故か刀に手をそえる。

主水「・・・笛屋から聞いたぜ。」

作造は口を開く。



作造「久しぶりかな・・・こうやって八丁堀と話するの。」

作造は主水を知っているようだ。

主水「いつ江戸に戻って来た。」

作造「3日前かな。」

主水「何をしに？」

作造「関係ないでしょう。」

主水は刀を数センチほど鞘から抜く。

主水「真面目に答えやがれ。」

作造「危なっかしいなあ・・・まだ仕事やってるの？」

主水「俺の質問に答えろ。」

作造「・・・」

作造は魚を釣り上げて魚を箱に入れる、それと同時に釣り糸を切り主水の手に向けて巻きつける。

主水「てっ・・・てめえ・・・」

作造「どう？なまってないでしょう、北町である人と仕事やってたから。」

作造は仕事人だったのだ。

作造「答えるよ素直に・・・北町の奉行所が動き出したからね、こ  
つちで身を隠そうってわけ。」

主水「なるほど・・・仕事はやってるぜ。」

作造「そう・・・じゃあ。」

主水「待て、糸をほどけ!!」

作造「ハイハイ。」

・・・

主水「ここでも仕事やるつもりか?」

作造「身を隠すために来たからね、やるとしても10回に1回程度  
ね。」

主水「そうか。」

つづく

交代連鎖 前編（後書き）

後編はまた少し間があきます。

## 交代連鎖 後編

新大老が坂上慎之介になってから江戸の町では血が飛び散るようになった。

住民「お許してください!!向こうの者が悪口を言ってきたからつい手を上げてしまったんです!!」

慎之介の護衛「問答無用!!」

住民「ぎゃあああああ・・・」

居酒屋の女店員「そんな!?!お茶をこぼしてしまったから謝っているではありませんか!?!」

慎之介の護衛「慎之介の決めた事だ、死ね!!」

居酒屋の女店員「ぎゃあああああ・・・」

慎之介は護衛や自分が気に入らない事が起これば斬っても良いというのだ。

慎之介は住民にちょっとした間違いが命取りになると伝えていた。

南町奉行所・・・

主水「面倒な事になってるな。」

主水は瓦版を読み慎之介にいらだっていた、そこに上司の田中が

田中「中村さん！！瓦版を読む暇があるなら早く見回りに行きなさい！！！」

主水「あつ、はい。」

田中「早く早く！！！」

主水は町の見回りに出た、住民は変わりなく生活していたが内心怯えているのがわかった。

主水（住民が震えてやがる・・・見てらんねえや。）

すると断末魔が聞こえた。

主水「！？」

主水は悲鳴のした場所へ走る、そこには又吉、菊蔵、加代がいた。そして作造も・・・男が切り捨てられており女が寄り添い泣いていた。

女「何で！！この方はあなたがたの顔を見ただけではないですか！！！」

慎之介の護衛1「その者は私達の顔を見て内心不満を持ったに違いない、行くぞ。」

慎之介の護衛2「恨むんならその男の心を恨みな。」

慎之介の護衛はその場を立ち去り女は泣き崩れた。

主水（坂上慎之介・・・か。）

すると作造が主水に近づいて話しかけた。

作造「八丁堀、慎之介のそばにいる平蔵も、大老処刑事にからんでるぜ。」

主水「おめえ・・・調べたのか。」

その夜・・・

昼間の女がわずかな金を持ち、ぼろ寺に来た。

女「ここに金を置けば、恨みを晴らしてくれると聞きました。」

ぼろ寺の影には又吉、木の上には菊蔵、寺の中には加代と主水が隠れている。

女「坂上慎之介は・・・私の未来の夫の仇・・・恨みを・・・恨みを晴らしてください。」

女はそう告げその場を立ち去った。

・・・

又吉「八丁堀・・・やるのか？」

主水「でもよお、恨みがあっても証拠が無けりゃよお。」

菊蔵「慎之介の護衛はともかく、慎之介自身や平蔵はまだ確信して

るわけではないんでしょう?」

加代「そういえば八丁堀、さっき誰かと話してなかったかい?」

主水は口を開く。

主水「あいつが言ったぜ、平蔵が前大老を処刑にして慎之介を大老にするために仕組んだってな。」

一同は驚愕した。

加代「あの男が情報を?」

菊蔵「でも何でその人が・・・」

又吉「そんな事はどうでも良い、その情報が確かなら仕事できるだろ。」

加代「・・・そうだね、的は4人だから誰か2人仕留めておくれ。」

又吉「俺だな。」

又吉が2人分の金を手に取ろうとしたその時、1人分の金が何かに弾かれて何者かの手に渡った。

又吉「なっ、誰だおい!?!」

主水「出てきな、作造。」

作造が姿を現した。

又吉「あんたはあの時の釣り男!？」

菊蔵「八丁堀、あの方は？」

主水「北町の仕事人、釣り道具の作造だ。」

加代「ああ、そういえば北町に行った時そんな奴いたわね。」

作造「人をそんな奴呼ばわりしないでおくんなせえ、仕事・・・手  
伝わせてもらえるかい？」

又吉「何？」

菊蔵「良いじゃないですか、ちよつどのも4人なんですし。」

主水「金も均等でちよつど良いや。」

加代「3対1だよ笹屋、諦めな。」

又吉「チツ。」

又吉は舌打ちをし寺を出た、寺の中の一同もロウソクの火を消し寺  
を出る。

.....

慎之介の護衛1「今日は2人か、おめえは？」

慎之介の護衛2「4人だ、へへ。」



慎之介の護衛は慎之介の館に戻る所だった。

2人は館の扉の前に立ち扉を開けようとするが

慎之介の護衛2「ん？可笑しいな、開かないぞ？」

慎之介の護衛1「どうなってんだ？」

扉の向こうには作造が立っていた、作造は懐から釣り糸を取り出す。そして館の小さな扉を開ける。

慎之介の護衛1「妙だな、見てくる。」

護衛1が小さい扉から頭を出して様子を見る、それと同時に作造の釣り糸が護衛1の首に巻きつき引きずりこまれた。

慎之介の護衛2「どっ、どうした!？」

護衛2が護衛1のところに駆けつけようとするが屋根から又吉が飛び降りてきた。

又吉は笛のふたを取ると中から太い針が飛び出す、その針は飛び出すと同時に固定された。

慎之介の護衛2「おっ、おのれ!！」

護衛2が刀を抜き斬りかかるが又吉はそれをかわし

又吉「お命・・・頂戴!！」

指先で針の出た笛を華麗に回し護衛2の首に突き刺す。

針を抜くと護衛2は倒れた。

そして作造は釣り糸を徐々に引き上げていき護衛1の首を締め上げる。

護衛1「かつ・・・はっ・・・」

作造は釣り糸を指に絡ませ一気に引き上げて首を完全に締め上げた。護衛1はピクリとも動かなくなった、作造は糸をほどき又吉と共にその場を立ち去った。

・・・

平蔵「ああ、慎之介様が大老になってからというもの・・・毎日が祭のようだ。」

自分の部屋で酒を飲んでいる平蔵、すると琴の音色が響く、平蔵はふすまを開けるとそこには女が庭で琴を弾いていた。

平蔵「ん？おお、良い女だ近くに来い。」

女はゆっくりと近寄り、平蔵は手を伸ばし女に抱きつく。

平蔵「おお、良い女だ。」

その時

「平蔵さん・・・川の向こうに・・・良い女たくさんいるよ。」

平蔵「!?!」

気づけば琴の爪をつけた指が平蔵の体に深く刺さっていた、女は女装した菊蔵だったのだ。

菊蔵「じゃあ地獄だね。」

平蔵は倒れた、菊蔵はその場から立ち去った。

.....

慎之介「ははは、大老とは良いものだ。」

「最近大老の交代連鎖が流行ってるらしいぜ。」

慎之介「!?、何者だ。」

慎之介は部屋のロウソクの火を消し、ふすまにうつる影を見つけた。

慎之介「おのれ・・・」

慎之介は刀を構えてふすまを開ける、しかし誰もいない。

慎之介「何だ?・・・!?」

すると後ろから激痛が走る、刀で刺されたのだ。

主水だった。

主水「これで交代連鎖成立だ。」

主水は刀を抜き鞘におさめる、慎之介は倒れ主水はその場をゆっくり立ち去った。

.....

中村家・・・

主水「ただいま戻りました・・・お母様？りつ？」

するとせんとりつが猛スピードで主水に駆け寄る。

主水「どうしたんですか慌てて？」

せん「婿殿、私達に隠れて・・・こんな物を貯めておりましたね？」

それは主水のへそくりだった。

主水「そっ、それは!？」

りつ「嬉しい限りです、私達のために貯めてくれるなんて。」

せん「さっそく半分食事に使わせてもらいました、婿殿・・・」

せんりつ「ありがとうございます。」

主水「はああああ。」

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6569m/>

---

～ 藤田まことさん追悼～      !!必殺仕事人!!

2011年3月14日18時26分発行